

# 軍事史学

第47卷 第4号

## 巻頭言

### 外国の軍事史研究の意義と課題

何故わざわざ外国の軍事史を研究するのか。研究者それぞれに理由はあるだろうが、強いて言えば日本の軍事史研究では扱えない事例の研究ができ、さらにそこから教訓が得られるからである。

私の専門はドイツの軍事史、特に第二次世界大戦の独ソ戦である。それを研究テーマにした理由は、独ソ戦が人類史上最大規模の戦いで、約四年間に亘って独ソ両軍数百万人の大兵力が広大な戦場で衝突した稀有な事例であるからである。そこから得られる教訓は、大部隊運用と陸上作戦の諸原則の確立に貢献するだろうし、カール・フォン・クラウゼヴィッツが主としてナポレオン戦争の体験と研究から『戦争論』を著したことを考えれば、二十世紀の地上戦（関連の航空作戦も含む）の総括は、独ソ戦の研究の中から導かれるのではないかと考えている。

しかしながら外国の軍事史研究には、外国を研究対象とする故に特有の課題がある。まず史料の問題である。大抵は日本国内での収集は不能か不十分で、研究対象国で収集する必要があるが、国によっては、その入手は容易ではない。私の場合、独ソ戦のドイツ側の史料はドイツ・フライブルク軍事公文書館の所蔵文書と米国立公文書館所蔵のドイツ押収文書のマイクロフィルムで容易に入手できるが、ソ連側は、独ソ戦開始以降の史料をロシア国防省が直接管理していて、さらにソ連時代の秘密主義も残っており、未だにその閲覧、入手は容易ではない。次は語学の問題である。独ソ戦の研究では、当然の事ながらドイツ語とロシア語で文献、史料を読む必要がある。さらに米英での研究成果を知るために英語も必要である。しかしながら文献、史料の読解に限っても三方国の外国語を修得することは、これまた容易ではない。

そうは言っても、外国の軍事史の研究には日本の軍事史研究では得られない成果や教訓が多々あり、これらの課題を克服して研究を進める価値は大いにあると思っっている。それ故に外国の軍事史研究を志す、特に若い研究者の方々には一層の健闘を期待する。その成果を生かす事によって我が国の軍事史研究に、より広い幅と深みが出るのではないかと信じている。

（吉本隆昭）